

神奈川支部情報

戦犯管理所訪日団歓迎行事特集号

発行日 2012年5月3日

<発行者> 撫順の奇蹟を受け継ぐ会神奈川支部

<連絡先> 松山英司 TEL/FAX 046(871)4263

e-mail kan.mat.hid@tbc.t-com.ne.jp

支部 HP <http://kanagawa.uketugu.org/>

郵便振込口座 00190-2-114578

4月28日、絵鳩さんにお会いできることを本当に楽しみにされていた撫順戦犯管理所張継承所長を団長とする訪日団が神奈川を訪れました。湘南日中友好協会の皆様のご協力を得て、急な呼びかけに応じていただいた50名に及ぶ参加者とともに、神奈川支部が企画した「白寿を迎えた絵鳩毅さんと管理所職員との交歓会」と「聶耳（ニエアル）記念碑への献花式」を盛大に執り行いました。ひとまず、そのときの様子の一部（張所長のあいさつと絵鳩さんの「謝辞」）を報告します。どの場面もたいへん印象深く、意義深いものでありました。その後の質疑応答や聶耳記念碑献花式については、後日詳しく報告します。

張継承所長あいさつ

2012/04/28 白寿を迎えた絵鳩毅さんと管理所職員との交歓会において

本日ここに参加されている皆さま、こんにちは。

私は今回、初めて訪日の機会を得て、たいへん楽しみにして参りました。その中で、今日こうして絵鳩さんにお会いできたこと、神奈川県に来ることができたことを、たいへんうれしく思います。



今日はゴールデンウィークの初日で、日本では皆さんが行楽にお出かけになる日だと聞いています。それにもかかわらず多くの方が参加されて、遠くから来られた方もいらっしゃる聞き、たいへん感謝しております。

皆さんもご存じのとおり元中帰連の方々はいよいよ高齢になっておられます。今回の訪日は、その方たちにお会いするということが第一の目的です。

そして第二の目的は、受け継ぐ会や日中友好協会をはじめ、中日友好を進める団体との交流を通じて信頼を深めよう、ということです。今日、ここに来たのは、神奈川県では松山さんたち撫順の奇蹟を受け継ぐ会神奈川支部の皆さんや、日中友好協会等の団体のみなさんの活動が活発に行われていることをお伺いしていましたので、どうしても来たかったということです。

今日、ここに参加されている方の中で撫順戦犯管理所を訪れた方もおられますが、まだ訪れたことがない方もおられるでしょうから、ここで撫順戦犯管理所に

ついて少しご紹介をさせて頂きたいと思います。

元々は日本軍国主義者が戦時中に「撫順監獄」として建設したもので、目的は中国人を閉じ込めることにありました。1945年から中国政府の管理下に入り、1950年に撫順戦犯管理所へと改装しました。シベリアからの日本人戦犯を受け入れるためでした。

最初に撫順戦犯管理所に収容された人数は969名でした。収容された戦犯たちに中国政府は人道的な待遇を与えました。撫順戦犯管理所に収容されていた戦犯と太原戦犯管理所に収容されていた140名の戦犯たちのうち1017名は、56年に瀋陽と太原で行われた特別軍事法廷の裁判で、起訴免除になり釈放されました。その他の45名は有期刑の判決となりました。

有期刑の判決を受けた戦犯たちも、1945年から1950年に中国に引き渡されるまでシベリアに抑留されていた期間と、撫順戦犯管理所に収容されていた6年間の併せて11年間の全てが刑期に算入されました。また、45名は、1964年の4月までに全員釈放されて帰国しました。帰国された皆さんは中国帰還者連絡会をつくって、反戦平和の意志を伝えてこられました。

長い時間が流れ、皆さんは年をとられました。今ではご健在の方は本当に少なくなりました。25日に日本に着いて、今日までに7名の中帰連の方とお会いすることができました。その中で一番若い方が88才で、一番年配の方がここにおられる絵鳩さんで、99才になられます。



皆さん年をとられて、つぎつぎと亡くなられてたいへん残念なのですが、幸いにも2002年に「撫順の奇蹟を受け継ぐ会」が結成されました。この会は中帰連の皆さんの意志と精神を受け継いで活動されているので、そのことは嬉しく思っています。

中国に『前事不忘、后事之師』ということわざがあります。「前事を忘れざるは、後事の師なり」ということです。私たち戦犯管理所は、皆さんと手を携えて、過去のことを戒めとして未来に立ち向かい、心を通わせて世界の平和を目指しておたがいに努力していきたいと考えています。

管理所は特に1950年代の様子を復元するためにこれからも努力していきます。当時の独房や、炊事場、体操などをしていたグラウンドなど、35以上の施設が復元されました。皆様も、チャンスがありましたらぜひ撫順戦犯管理所へ来て下さい。私たちは皆様のご来訪を心からお待ちしています。(拍手)

99才(白寿)の絵鳩さん、たいへんお元気です

撫順戦犯管理所張継承所長のあいさつにつづいて絵鳩さんは例のごとくたいへん張りのある、大きな声で、準備をしておられた「謝辞」を述べられました。

張継承先生ご一行訪日団をお迎えして（謝辞）

2012年4月28日

絵鳩 毅



99才の絵鳩 毅さん



張所長と絵鳩さん

★張継承先生ご一行訪日団をお迎えして、僭越ながらご挨拶をさせていただきます。私＝絵鳩 毅は、以前「中国帰還者連絡会」の会員であり、現在は「撫順の奇蹟を受け継ぐ会」の特別会員であります。

★私は、今年3月に、おかげ様で99歳（白寿）の誕生日を迎えることができました。そして今、藤沢市辻堂の「老人ホーム」で、94歳になる妻と比較的健康に暮らしております。今日は、妻の体調があまり優れないので、この場への参加を失礼させていただきます。

★この度、撫順戦犯管理所長張継承先生御一同は、「中日友好」のためにはるばる来日なされ、とくに、私たち「中国帰還者連絡会」の旧会員にまで、このように個別訪問していただき、まことに感謝に堪えません。

★また、本日このような機会を設けていただいた「湘南日中友好協会」の皆さんと、「撫順の奇蹟を受け継ぐ会」の皆さんに対し、心から感謝します。

★過去、私は大学で哲学を専攻しましたが、卒業して長野県で中等学校の教師をしていた時、28歳で軍隊に召集され、以後3年余り、第59師団の一兵士として、中国山東省での侵略戦争に参戦しました。

★そして、敗戦の年の6月、大隊長の命令に服従して、教育中の初年兵30名に、罪のない中国人の捕虜4名を交互に刺突させるという戦争犯罪を犯してしまいました。

★敗戦の少し前に、わが師団は北朝鮮の方へ移動しておりましたので、ソ連軍による武装解除を受けてシベリアに連行され、5年間の強制労働に服しました。この間に、先の戦争犯罪を問われて中国へ送還されました。

★中華人民共和国に送還された私たち日本戦犯969名は、撫順戦犯管理所で6年間拘禁生活を送りました。だが、そこで私たち戦犯は想像もしなかった優遇を受けました。

★すべての国の監獄は、鞭^{むち}で自白を強要しては処刑を急ぐ場ではありますが、撫順戦犯管理所は、それとは天と地の差がありました。ここには、「人間愛と恒久平和の理念」が、^{さんぜん}燦然と輝いておりました。



★周恩来総理は、「戦犯とても人間である。人間である以上、その人格を尊重せよ」と指示されたと聞きます。撫順管理所には、強制労働がなかったばかりか、鞭打つ音も、怒鳴り声も、聞くことはありませんでした。

★管理所の職員たちは日に2食の高粱飯を食べながら、私たち戦犯には3度の白米の飯を与えたばかりか、正月や記念日には、お雑煮、お寿司、お萩などの特別食まで振舞ってくれました。

★日々の運動時間の確保は言うまでもなく、週に1度の入浴、月に1度の身体検査、理髪、体育日、春秋2回の体育祭と文化祭、数多くの映画鑑賞会、患者の民間病院への入院、有りあまる学習時間等々、まさに「至れり、尽くせり」の待遇でした。

★私たちは、「戦犯」のレッテルを貼られたために自暴自棄になって、当初は将棋や碁などの遊びにふけていました。だが、1年ほど経ってそれに飽きて、今度は本が読みたくなり管理所にお願いすると、次々に『人民日報』、各種の日本語図書、『毛沢東選集』などを貸してくれました。私たちは真剣に学習しました。

★私は先ず『人民日報』を通じて、戦後の世界に怒涛のように湧きおこる民主勢力の強大さを知り、ファシズムの衣を脱いで、新時代についての学習の必要性を痛感しました。

★また、毛沢東主席の『実践論』『矛盾論』を共同学習して、私の学生時代の学習は、祖国の危機を傍観した「理論の遊戯」に過ぎなかったことを、強く反省させられました。

★さらにまた、毛主席の『持久戦を論ず』の中には、八路軍の守るべき民主として、第1に「上級と兵士との民主」、第2に「軍と民衆との民主」、そして第3に「捕虜との民主」という驚くべき項目に接し、私の感動はとまりませんでした。

★私は過去、日本軍が中国人捕虜など人間と思わず、食事もろくに与えないで、やたらに殺害した事実を思い浮かべ、わが「大和民族」とその一員である自己とを深く恥じました。

★こうして私は、次第に中国共産党と中国人民の「恒久平和」への強い願いを知り、被害者である中国人民の立場に立って、過去の侵略戦争を批判できるようになりました。

★私は、過去侵略軍隊の一員でありながら、自己をその埒外^{らち}においていました。私は、日本軍隊の野獣性にはつねに批判的だったし、自らの意思で中国人を殺害したことなど一度もなかった、としてでした。

★だが、銃を執って侵略軍隊の一員以上、侵略軍隊のなかでの思想意識の相違などは被害者の立場に立てば、とるに足らない問題であります。

★その上、私は大隊長の命令に屈従して、罪もない中国人捕虜を、初年兵に殺害させてしまいました。私をこの罪に陥れた大隊長の責任は、もちろん決定的に重いし、またその責任は「上官の命は朕の命と心得よ」と宣言した、日本国軍隊の総帥、天皇にまで及ぶこともまた確かでありましょう。

★だが、大隊長の無謀な命令を実行したのはこの私であり、私の責任です。こう悟ることができた私は、全所を挙げての「認罪運動」の試練を経て、侵略戦争中に犯した一切の罪を告白し、中国人民に心から謝罪しました。

★中華人民共和国の日本戦犯に対する軍事裁判はきわめて寛大でした。1062名中わずか45名が軍事裁判にかけられましたが、そこには死刑も終身刑もなく、最高刑が20年の禁固刑でした。だが、この刑期のなかには戦後すでに経過していた11年が算入されていたので、これらの人々も8年後には一人の死者を除き、全員が無事に帰国しました。

★その他の日本戦犯は、全員「起訴免除～即日釈放」という寛大政策に浴して、1956年の夏、3班に分かれて帰国しました。私も最終班の一人として、再び懐かしい祖国の土地を踏むことができました。

★28歳で軍隊にとられた私は、すでに43歳になっていましたが、私の15年間にわたる戦争の暗い歴史のなかで、最後の期間を「撫順戦犯管理所」で過ごせたことは「本当に幸せであった」と、今なお思っています。

★なぜなら、「撫順戦犯管理所」は、敵をも愛する正に奇跡的な人道主義によって、私たち戦犯を「侵略軍隊の尖兵」から、「平和を守る活動家」に転変させていただいたからであります。

★帰国後、私たちは「中国帰還者連絡会」を結成して40年余り、高齢のために会を解散するまで「侵略戦争に反対し、平和と日中友好に貢献する活動」を及ばずながら続けてまいりました。

★この活動の中で特記すべきことは、会は日本社会に初めて、先の侵略戦争の実態を暴露して、強い衝撃をあたえ、国民の反省を生み、また、日中国交正常化の国民運動の一翼を担うことにいささかでも貢献できたことです。

そして、この活動こそが帰国後における生活の中で大きな救いでもありました。また、私たち後半生の生きがいでもありました。

★「撫順戦犯管理所」、それは有史以来最高の監獄でありました。私は今、ここにあらためて、中華人民共和国と中国人民に、心からのお礼を述べさせていただきます。ありがとうございました。

★同時に、来日されました張継承所長ご一同のお力により、撫順戦犯管理所が「世界平和の金字塔」として、必ずやさらなる光芒を加えられますことを確信し、祝福して、僭越ながら、私の拙い謝辞といたします。ありがとうございました。(拍手)